

フォトセラピーパッチ技術:どのように機能するのですか？

ライフウェイブ光線療法パッチは、現在販売されているその他のパッチ技術とは異なり、経皮的ではなく、体内に入るものは何ともありません。パッチの自然な生物学的内容は、既に自然に起こっている特定の生物学的反応を増強するために身体の自然磁場を変調する生体信号を作り出すもので、米国のFDAとオーストラリアのTGAにクラスIの医療機器として登録されました。有機材料は、その光学(キラル)、液晶および半導体特性のために選択されている。生物学的分子は電子的にも化学的にも作用する。確かに、電場や磁場で身体を刺激することは、医学においてよく受け入れられています(Malmivuo and Plonsey、1995)。ライフウェイブのパッチ技術では生体電気刺激も使用されていますが、この刺激は、パッチ内に存在する物質の体の自然磁場による特定の電氣的周波数の生成によるものです。溶液ベースの自己組織化と呼ばれるナノテクノロジー製造プロセスを使用して、光学的に活性し導電性のパッチ材料は、分子アンテナとして機能するナノサイズの分子クリスタルを形成する。振動磁場[人体]に導電性材料[パッチ]を配置することにより、導電性材料に電気信号/周波数が生成されます。各パッチタイプの独自のソリューションは、既存の生物学的反応を模倣した特定の波長の光子を反映します。パッチは赤外線領域で非常に効率的に光を伝えることが知られているので、主要な経絡の経穴に適用されます。

David Schmidt と Suzanne Somers とのインタビューの第1部は、2016年3月19日に放映されました。この週間プログラムは、疼痛管理の主要な専門家の1人として広く認められている Johns Hopkins University School Medicine の准教授である Paul J. Christo 博士が主催しています。インタビューでは、過去の主な健康問題との闘いや、彼女がどのように痛みを克服し、彼女の人生を改造したかについて、Suzanne の過去の闘いについて触れています。デイビッドは、Suzanne が自分の健康をサポートするために使用している特許取得済みの光線療法パッチを明らかにする洞察を提供しています。彼は、私たちの技術が痛みを軽減するために光エネルギーをどのように利用しているのか、ウェルネスを促進するための光線療法の魅力的な未来を描いています。私たちは現在、低レベルの光を使って身体に独自の抗酸化物質を産生させ、極めて迅速な鎮痛をもたらす非常に好都合な生物学的変化を起こすことができることを知っています。

3月26日土曜日の午後2時のPDTで、LifeWaveの光線療法パッチが彼女の利益をどのようにもたらしたかをスザンヌが解説しているので、第2部のインタビューに目を通してください。さらに、デービッドはパッチがどのように広範な利益をもたらすかについてより詳細に説明し、健康増進のための光線療法の将来を検討します。

<http://lifewave.com/int-en/healthieru/patches.asp>

身体の電氣的性質

身体の細胞と組織は、情報の伝達と生物学的プロセスの制御を可能にする本質的な電氣的性質を有する(Malmivuo and Plonsey, 1995)。体内の情報フローの通過は、電子とイオンの流れです。視覚、聴覚、触覚はすべて電気情報の伝達の例です。目、耳および皮膚には、光波、音波および機械波を脳に伝導する生体電気信号に変換する感覚変換器がある(Berne et al, 1993)。同様に、ライフウェイパッチによって作成された生物学的に有用な生体電気周波数は、筋肉組織に存在する膜受容体および酵素を含む様々な細胞型の小さな細胞内成分に共鳴的に結合する。

神経系における情報の伝達モードは、周波数変調(FM)である。脳は、感覚器官から送られた生体電気信号(行動電位と呼ばれる)に存在する情報を処理し、筋肉、ホルモン放出、および様々な器官機能の自発的な収縮を制御するために神経を介して他の生体電気信号を送ることによって応答する(Nicholls et al, 2001)。

人間の生体磁場

SQUID(超伝導量子干渉デバイス)磁力計は、人体の周りに弱い磁気エネルギー場が存在することを示しています。この生体磁場は、電氣的には体積導体である人体内の生理学的活動のために生じる。細胞、組織および血流の生物学的活性は、皮膚表面上で検出され得る身体および電場に電流を生成する。物理法則によれば、体積導体を流れる電流は常に磁場を発生させる(Jackson, 1975)。

生体磁気信号は、組織細胞の筋肉収縮または神経興奮によって生成される細胞内電流から生じると考えられている(Rottier, 2000)。細胞内で生成された電流は、細胞膜タンパク質結合および細胞イオンチャネルを介して細胞外に流れ、細胞外マトリックス内に流入し、生体電気電流が体内に流れ、したがって弱い磁場が生じる。心臓だけで生成される磁場は、地球磁場の100万分の1の強さです(Baule et al, 1963)。脳の生体磁場は心臓の100倍弱い(Cohen, 1972)。

ライフウェイのEnergy Enhancerパッチはパッシブトランスミッタシステムとして動作し、身体の脈動磁場はパッチ内の成分によって周波数変調された高周波キャリア波として働きます。

生体分子による電磁エネルギーの吸収

高エネルギー電磁場は、加熱、イオン化、および生物組織の破壊を引き起こす可能性があるが、低エネルギー場は他のものより微妙な生物学的効果を有する。低エネルギーレベルでは、共鳴エネルギー移動が起こるとき、電荷の移動が加熱ではなく主な効果である。Louis Heynickによれば、低エネルギー周波数は、分子の基本的なアイデンティティを変更または破壊することなく、分子の配向および構成を変化させる可能性がある(Heynick, 1987)。生物学的組織における特定の代謝反応に関与する特定の生物学的分子を共鳴的に活性化するためには、電磁波の選択は、影響を与えたい化学反応に関与する分子の吸収スペクト

ルに一致し、特異的でなければならない。パッチ内に形成された有機ナノサイズのクリスタルと体の熱磁場との間の相互作用は、無線信号が送信機から家庭の無線機(受信機)に送信されるように身体に送信される特定の一群の振動生体電気信号を生成する。既に送信されている周波数に予め調整された分子は、これらの特定の生体電気信号を受信する。周波数特異的なエネルギーがこれらの分子によって吸収されると、既に天然に存在する生化学反応の活性化を増強することができる。

パッチ生体信号の身体への伝達

人体の電子生物学の観点から、身体の細胞は、アンテナのようなある特定の周波数に共鳴する電子的能力を有する液晶成分(タンパク質、膜、膜受容体、DNA、および RNA)を含む(Beal, 1996a, 1996b)。ある意味では、本体は液晶発振器で構成されています。細胞の生物学的液晶分子は、協調的挙動を示す複雑な構造で組織化されている(Ho, 1998)。正確な特定の生体電気周波数が身体の細胞に供給されると、これらの液晶分子は共鳴的にエネルギーと情報を吸収する(Adey, 1988, 1993a; Beal, 1996a, 1996b)。

身体の細胞成分は電気回路として振る舞う(容量性、誘導性および抵抗性要素、生体電位電圧源およびイオン電流および電子電流フローを有するため)。これにより、電気信号および情報が、生体電気信号の周波数によって運ばれ、細胞に出入りすることが可能になる。細胞はまた、膜、膜受容体、および同調回路として振る舞う細胞骨格タンパク質複合体からなる成分を有する。これらの細胞同調回路は、特定の周波数および振幅の窓にある非常に特異的な生体電気信号の検出、共鳴吸収および増幅を可能にする(Adey, 1981, 1988, 1993a; Garnett, 1998, 2002; Ho, 1998)。

電氣的アンテナ/トランスデューサとして機能する細胞膜受容体の周波数変調は、刺激の周波数で細胞膜を横切る電圧変動をもたらす(Dallos, 1986; Russell ら, 1986)。周波数変調は、電圧変化に応答する細胞膜の受容体を活性化し、これらの受容体は、細胞の電氣的、収縮性および代謝活性を調節する他の膜タンパク質に結合する。

共鳴エネルギー移動

共鳴エネルギー移動の現象は、同一の同調フォークによって実証することができる。一方のフォークが打撃され、他方のフォークの近くに置かれているが、接触していないと、打撃されたフォークによって生成された音の振動は、実際にエネルギーを他の音叉に伝達し、それを響かせて振動させる。酵素および膜受容体は、すべてのタンパク質と同様に、三次元構造に折り畳まれる。タンパク質の三次元構造は、各タンパク質がアミノ酸のユニークな順序の配列からなるために生じる。ヒト細胞のタンパク質は、すべてL-アミノ酸と呼ばれるキラル分子で作られている(Nelson and Cox, 2000)。酵素および受容体は、オンまたはオフの位置に設定することができる電氣的スイッチのように、活性状態と非活性状態との間で前後に変動する能力を有する。これらのタイプのタンパク質の活性位置と休止位置との間のこの周期的移

動は、電荷の分布の可逆的シフトを伴い、電荷の三次元折りたたみおよび化学的結合部位を変化させる。構成的または立体構造的変化と呼ばれるこのタンパク質の折りたたみの変化は、これらのタンパク質の化学的反応性および電気的性質の変化をともなう(Wuddel and Apell, 1995)。新しい研究により、酵素と受容体が共鳴結合電場から直接的に伝達される電荷によって活性化されることが、現在、実証されている(Derényi and Astumian, 1998)。これは、そのサイクル内でコンフォメーション転移を受ける酵素および受容体で起こる分子内電荷移動が、振動電場から直接エネルギーを変換する能力をこれらの分子に伝達するからである(Astumian ら、1989)。

Ross Adey らは、弱い電磁界が、細胞内酵素を活性化する最初のメッセンジャーシグナルのように作用する細胞膜の糖タンパク質と共鳴的に相互作用することを示している(Adey, 1993b)。これらの電磁信号は、これらの膜タンパク質が電磁波周波数と電気的に結合するときに、細胞膜タンパク質のコンホメーション変化を引き起こす可能性がある(Adey, 1993b)。これは、細胞膜タンパク質が、細胞内部の化学プロセスを活性化するオフ電気スイッチとして振る舞う電気変換器のように作用することを意味する(Adey, 1980, 1981, 1988, 1998b; Adey ら、1982)。

このメカニズムが機能するために必要な重要なステップは、酵素または受容体が共鳴的に結合するように刺激したい酵素プロセスまたは膜受容体の共鳴周波数と正確に一致する、身体内に電場を生成することですフィールド。ライフウェーブパッチは、身体の磁場と相互作用して特定の生体電気周波数を生成し、エネルギーを共鳴的に伝達して体内の特定の化学過程を起こさせます。例えば、エネルギーの燃料源として脂肪を燃焼させる体の能力を加速させます。パッチ技術は体内で化学反応を起こさない。むしろ、より効率的に働くために既に起こっている生物学的反応を支援するだけです。

磁気誘導

ファラデーの電磁誘導の基本法則であるファラデーの法則(Jones and Childers, 1990)は、電線の近くで磁石を動かすだけで電線の導体に測定可能な電流を作り出すことができます。LifeWave のパッチシステムは、誘導の原理を利用するように設計されており、小さな電子導体やアンテナとして機能するパッチ内の自然のコンポーネントが使用されています。身体の振動磁場がパッチ内の電気的に活性な分子と相互作用すると、磁場はファラデー効果を介して電場の生成を誘発する。この誘導電場は、パッチ内に含まれる材料の特定の共鳴周波数を含む。さらに、身体の固有の振動磁場は、搬送波のように作用し、これらの周波数を身体に結合する。

体の磁場とLifeWave パッチとの相互作用は、身体の組織における特定の周波数の弱い生体電気的電流を誘発する。パッチによって生成される特定の周波数セットは、特定の化学反応および生物学的プロセスを活性化するように選択されている。

エネルギーエンハンサーパッチの生体認証効果

筋肉のスタミナの増加と脂肪からのエネルギーの生成

身体の筋肉は、各筋肉細胞が神経供給源に接続されるように設計されているので、脳が筋繊維を収縮または弛緩させることができます (Berne et al. 1993)。筋繊維が収縮すると、カルシウムイオンが筋線維に放出される神経信号に反応している。エネルギーエンハンサーパッチの1つの生体信号は、筋肉中のカルシウム放出を増加させ、筋繊維のより大きな割合が同時に収縮するようにすることである。

人体内の主なエネルギー源は、糖の燃焼または脂肪の燃焼です。砂糖の燃料値はグラム当たり 4.0 キロカロリーであり、脂肪燃焼はグラム当たり 8.9 キロカロリーを産生する (Stipanuk、2000)。人体は燃料源として砂糖を燃やすという自然な好みがありますが、砂糖を燃やすと脂肪の半分以下しか生産されないため、脂肪燃焼を増加させる方法ではエネルギーの利用可能性が高まります。

平均的な人では、運動の持続時間が延長されるにつれて、脂肪の代謝がますます重要なエネルギー源 (ATP) の生産になります。残念なことに、これは、運動の開始後遅くなるまで脂肪がしばしばほとんどの人にとってエネルギーの準備ができていないことを意味します。

エネルギー源としての脂肪の燃焼は、カルニチンとそれが相互作用する酵素と呼ばれるアミノ酸に絶対に依存します。カルニチンは、心筋および骨格筋の両方において脂肪酸代謝およびエネルギー産生に絶対的に必要とされ、脂肪を細胞質からミトコンドリアに輸送し、そこで脂肪を燃焼させてエネルギーを生成する。細胞がミトコンドリアに脂肪を持っていない場合、それを焼くことはできません。したがって、カルニチンは、脂肪由来の細胞エネルギーの生成において中心的な役割を果たす (Heinonen、1996)。

現時点での科学的な証拠によれば、カルニチンが不足している個体 (特に、Hoppel、2003) において、経口補給によって組織中のカルニチン濃度を増加させると、脂肪燃焼が増加することが既に示されている。例えば、心臓ストレス試験の前に心臓病患者に L-カルニチンサプリメントを投与すると、心臓はより少ない拍動でより多くの血液をより効率的に送り出す (Cacciatore et al.、1991)。

エネルギーエンハンサーパッチは、カルニチンのような天然物質の活性を最適化するのに役立つ細胞頻度変調を生成することにより、長鎖脂肪酸のミトコンドリアへの輸送を増加させるために特別に設計されました。

効果: エネルギーとスタミナの改善。

周波数コードによる生物学的制御

これは、酵素と、食糧成分 (代謝物) との相互作用であり、エネルギー供給と、自己生成組織を維持するために細胞が必要とするビルディングブロックを生成する。Fritjof Capra によれば、すべての細胞は、代謝のための食物として数百の小さな有機分子の同じユニバーサルセットを使用している (Capra、2002)。細胞内の化学反応を制御する機構は、関与する物質の原子

の電磁振動または周波数である (Brugemann、1993)。ある意味では、すべての生物学的プロセスは化学コードによって制御され、その化学コードは周波数コードによって制御されると言えるでしょう。

物理学の法則によれば、宇宙のすべてが振動状態にあります。物質の共鳴周波数は、物質または分子である各物質の固有の振動速度または周波数として定義される (Jones および Childers、1990)。物質の共振周波数 (振動) が一致すると、物質間でエネルギー移動が起こります。さらに、細胞内の生体分子が、それらの共鳴周波数に一致する外部印加電界または内部生成電場に曝された場合、電界は分子に結合したと言い、その後分子は電界からエネルギーを吸収する。細胞膜は、電場と細胞との間の相互作用の主要部位である (Adey、1993a)。

共鳴は、発生源から放出された音響的または電氣的振動が、受容構造の吸収周波数と一致し、細胞または細胞成分の固有振動周波数を増幅するエネルギー転移を生じる場合に、生物学的分子または細胞全体で生じる (Beal、1996a、1996b)。

細胞のすべての代謝反応は、その化学的性質によって通常規定される調節プロセスの複雑な相互作用によって制御されるが、Brugemann によれば、内部化学調節力は、生物物理的に特異的な電磁振動によって制御される (Brugemann、1993)。この物理的原理は、影響を与えたい代謝プロセスに関与する化学物質の周波数コードと正確に一致する、非常に弱い電場が身体に加えられるか生成される場合に、非常に特異的な代謝応答を得ることを可能にする。非常に少量の特定の特定のシグナル伝達分子 (例えば、プロスタグランジンおよびホルモン) によって細胞内で引き起こされる化学反応の生物学において、多くの例が現在存在する。重要なのは、関与する物質の量だけではなく、必要な物質が、適切な時期に正確な場所で利用可能であることです。シグナリング分子の同じ共鳴周波数を有する電場の印加によっても、同じ効果の一部を達成することができる。

生物学的分子の共鳴周波数を有する電磁場が体内で生成されると、その特定のタイプの伝導性分子は、場からのエネルギーを吸収し、誘導電子流を受ける。身体の表面に現れる電場電位は、臨床心電図 (ECG)、筋電図 (EMG)、脳波記録 (EEG) の基礎となる。

広く理解されていない事実は、身体の細胞が正確に正しい周波数と振幅の電気周波数に絶妙に反応するということです (Adey、1993a、1993b)。身体の細胞には電磁フィルターが内蔵されているため、特定の周波数と振幅の電磁界にしか反応しません (Adey、1993a、1993b)。

参考文献

アディーWR。弱い電磁場との組織相互作用における周波数およびパワーウィンドウ。Proc IEEE 1980; 68(1):119-125 を参照のこと。

アディーWR。非イオン化電磁場との組織相互作用。Physiol Rev 1981; 61:435-514。

アディーWR。細胞膜を横切る生理学的シグナル伝達および極低周波数電磁場の協調的影響。In: 生物学的一貫性と外部刺激に対する反応、H.Frohlich 編、Heidelberg、

Springer-Verlag、Pgs148-170、1988年。AdeyRW

。細胞間の囁き:組織における電磁場と調節機構。Frontier Perspectives 1993a;3(2):21-25。
アディーWR。生物学と医学における電磁気学。モダン・ラジオ・サイエンス(松本浩編)。
Oxford, England:Oxford University Press, pgs 277-245、1993b。
Adey WR、Bawin FM、Lawrence AF。覚醒した猫の大脳皮質からのカルシウム流出に対する
弱い振幅変調場の効果。Bioelectromagnetics 1982; 3:295-308。
Astumian RD、Chock PB、Tsong TY、et al。振動およびエネルギー駆動変動が酵素触媒およ
び自由エネルギー変換の動的に及ぼす影響。Phys Review 1989,39(12):6416-6435 に記載
されている。
Astumian RD、Robertson B。膜タンパク質に対する振動電場の非線形効果。J Chem Phys
1989; 91:4891-4901。
Baule GM、McFee R。心臓の磁場の検出。Am Heart J 1963; 66,95-96。
Beal J。Biosystem Liquid Crystals:電気・磁場に対する生体系やヒトの過敏症を説明する相
互作用機構に関するいくつかの仮説。1996a。ウェブサイト:http:
//www.cyberspaceorbit.com/BIOSYSTEMLIQUIDCRYSTALS JamesBeal.htm。
Beal JB。バイオシステムズの液晶と自然界および人工電磁界(EMFs)の潜在的影響 1996b。
ウェブサイト:http://frontpage.simnet.is/vgv/jim1.htm
Berne RM et al。生理学第3版。St. Louis、Mo: Mosby-Yearbook、Inc.、1993。
ブルゲマン H バイオ共鳴および多重反復療法(BRT)。ブリュッセル、ベルギー:Haug
International、1993 年
.Cacciatore L、Cerio R、Ciarimboli M、et al。運動誘発性狭心症患者における L-カルニチン
の治療効果:対照研究。Drugs Exp Clin Res 1991; 17:225-235 に記載されている。
Capra F。隠れた接続。ロンドン、イングランド:フラミンゴ、2002。
Cohen D。磁場脳波記録:超伝導磁力計 Science 1972; 175:664-666 による脳の電気活動の
検出。
Dallos P。内耳と外の有毛細胞の神経生物学:細胞内記録。Hear Res 1986; 22:185-198。
DerényiI、Astumian RD。RLC 電気回路における膜輸送体によるコヒーレンスおよびエネルギー
蓄積の自発的開始 RLC 電気回路における膜輸送体によるコヒーレンスおよびエネルギー
貯蔵の自発的開始。Phys Rev Lett 1998; 80:4602-4605 に記載されている。
ガーネット M。ファーストパルス:がん研究における個人的な旅。New York、NY:First Pulse
Projects、1998。
Garnett M。遺伝的コードの時間、エネルギーおよび距離パラメーターの欠如を補償する遺伝
子ポリマー拍動の誘導相状態。http://www.electrogenetics.net/electrogenetics.html、
2002 .
Heynick LN。ラジオ波放射の生物影響に関する文学の批判:空軍作戦に関する包括的な見
直し 最終報告書 USAFSAM-TR-87-3(1987 年 6 月)。
Ho MW。レインボーとワーム:生物の物理、第2版。リバーエッジ、NJ:World Scientific、1998。

ホッペル C.正常および改変脂肪酸代謝におけるカルニチンの役割。Am J Kidney Dis 2003 Apr; 41(4 Suppl 4): S4-12。

ジャクソン JD(1975):クラシックエレクトロダイナミクス、第2版。New York、NY: John Wiley、1975。

Jones ER、Childers RL。現代カレッジ物理学。Reading、MA: Addison-Wesley Publishing Company、1990年

。Malmivuo J、Plonsey R. Bioelectromagnism-生体電気および生体磁場の原理と応用。New York、NY: Oxford University Press、1995。

Nelson DL、Cox MM。ライヒンガー原則生化学第3版。New York、NY: Worth Publishers、2000。

Nicholls JG、Martin AR、Wallace BG、Fuchs PA。ニューロンから脳へ、第4版。サンダーランド、マサチューセッツ州: Sinauer Associates、2001。

Rottier R.医学における超電導体の応用。2000年9月20日。http:

//staff.ee.sun.ac.za/wjperold/Research/Superconductivity/Team/Rottier/art/biomag_apps.pdfを参照してください。Stipanuk MH。ヒト栄養の生化学的および生理学的側面。

Philadelphia、PN: WB Saunders Company、2000。Wuddel I、Apell HJ。電荷パルス実験によって探索されたNa、K-ATPアーゼにおけるナトリウム輸送経路の電気原性。Biophys J 1995; 69: 909-921を参照のこと。